

昭和八年中の邦文天文書一覽

水 野 千 里

例によつて、昭和八年中に手にしましたところの、邦文天文書に關し短評を試みませう。

1. 天文學辭典 山本一清、村上忠敬共著 ¥2.50 恒星社刊

本書は天文學一般用語及び各方面の術語、天體、星座、天文臺、天文學者其の他に關し内容的に解説を施されたものであります。元は、本誌に載つた『天文語彙』を増補されたもので、山本博士が大體の方針を示され、最初は海老恒治氏が執筆され、一時森川光郎理學士が筆を執られたこともあります、最後に村上忠敬理學士がこの事業を受け繼がれるに及び、同氏の熱心と、博識とが本書をして脱稿されたものであります。本邦では無論、外國でも天文専門の辭典は珍らしいものであります。素人も玄人も、苟くも天文を口にするものには必要缺くべからざる良書であります。

2. 少年少女科學讀本天文の卷 原田三夫著 ¥0.90 吉岡書房發行

少年少女の爲めに、原田理學士が執筆されたもの、星の見かた、星とは何か、星の動きかた、星の數と大さと種類、四季の星、天の河に就いて述べられて居ます。太陽系に關するものは卷を改めて出版されるさうであります。

3. 小學校教科書に現れたる天文教材解説 水野千里著 ¥0.30

東亞天文協會岡山支部發行

小學校教科書中國語、地理、理科書にある天文教材を解説したもので、緒言、第一章太陽系、第二章天球、第三章恒星、第四章星座と星の名、第五章天文臺、結言、附録には天文學參考書を掲げてあります。小學校教員各位の參考書、家庭に於いては父兄の參考書となり、又天文の入門書ともなります。

4. 地球物理學 寺田寅彦、坪井忠二共著 ¥0.80 岩波書店發行

寺田博士の名著「地球物理學」を増訂されたもの。地球物理學者よりは寧ろ其の専門以外の學徒並に一般好學の讀者の爲めに地球物理學といふものに關

する大體の概念を提供し、又この學に對する興味を喚起するの目的を以て書かれたものであります。本書は岩波書店創業20年の記念出版岩波全書の一冊であります。天文學に關するものでは、宇宙、天體物理學 I, II, 小惑星、重力、潮汐、時計等が出版されます。

5. 流星と隕石 神田清著 ¥0.30 三省堂發行

僅か117頁の小冊子でありますが、流星觀測者の必讀すべき好著で、流星に重きを置き、隕石の概要を述べてあります。

6. 曆法及時法 平山清次著 ¥1.80 恒星社發行

平山博士の天文月報で發表された論文を主とし、これに其の他の論文を併せてなつたもので、各種の曆、曆法改良案の分類及び評論、週について、日本に行はれたる時刻法、月と時、常用時の改良に就いて、夏時法の現在、二十四時通等法、附録三篇からなつて居ます。其の道の權威者の筆になつたものであるから是非一讀されんことを奨めます。

7. 星座行脚 小森幸正著 ¥0.50 新光社發行

昨年科學畫報の附録として出版されたものを更に單行本とされたもの、星座の大要を知るのによろしい。

8. 星座神話 野尻抱影著 ¥2.00 研究社發行

毎月の星座を神話を主として述べ、遊星神話と月の神話をも併せてあります。星座の本は澤山ありますが、本書位立派な挿畫が多くあるのはありません。この畫を見るだけでもよろしい。88の挿畫中には世界各國の美術館にあるものが大部分で、よくもこれだけ蒐集されたものかと、感服の外はありません。

9. 力學史傳 福本正人著 ¥2.50 恒星社發行

力學に關する有名な五十七人の列傳であつて、天文學者が多く含まれて居ます。邦文科學者の傳記や、天文學史二三ないでもありませんが、本書の如く、紀元前五世紀から今日迄の科學者を順次に列記したものは少くあります。

10. 大分縣被贈位者略傳 大分縣知事官房編纂 ¥3.00 警眼社發行

昭和八年七月三日大分縣知事田口易文閣下に、大分縣東國東郡富永村に三浦晋といふ天文學者がりましたことを承り、古本屋を探し本書を購求した

のであります。三浦晋字は安貞といひ梅園と號し、又學山、存山、二子山人、洞仙、東川居士、無事齋主人等の別號があります。祖先は相州三浦郡の人で、世々源家の士でありました。祖父を義房といひ、晩年髪を剃り轍山と號し始めて醫を業としました。其の子儀一は虎角と號し、父の業を繼ぎ、矢野氏を娶り、安貞を生みました。時は享保八年八月二日でありました。寛政元年三月十四日永眠されましたが六十有七でした。安貞生れて穎異、幼時から成人の如く、舉止群童と違つて居ました。幼時獨學。十六歳で藩の儒員綾部綱齋に就いて教へを受け、二十三歳の時長崎に遊び海外の新事物に接しました。安貞年少の時から、宇宙萬有の現象に疑ひを懷き、年弱冠の時漢譯の西洋星書を得て大に喜びましたが、之れに満足しませず、晴霄毎夜天空を仰いで星宿斗象の運行に注視して、刻苦研鑽致し、自ら一種の天球儀を製作し、遂に進んで一道の條理天地の間に存することを發見しました。

寶曆三年、年三十一の時自己の研究せし天地間の妙理を著さんと志し、「玄語」と名付け、曆年二十三、換稿二十三回を重ねまして、安永四年に至り初めて大成しました。「贅語」は「玄語」の補意とも謂ふべきもので、「敢語」は玄贅二語の餘論でありまして、聖賢の道を論じ、折衷するに條理學を以てしたものであります。これを安貞の三語といひます。

「玄語」は例旨、本宗、天冊活部、天冊立部、地冊沒部、地冊露部、小冊人部、小冊物部以上八卷二十八篇十餘萬言からなり、「贅語」は十四卷七十篇、「敢語」は全一卷九篇から成つて居ます。

忠孝の大義を以つて彝倫の根本とし、藩治の政策を建言し、文は達意を主としました。

明治四十五年二月二十六日從四位を贈られました。これ文化風教の爲めに貢獻したからであります。

11. 其他 天文年鑑 理科年表 が例年の通り發刊され、日本天文學會要報 第六號と第七號とが公にされ、科學畫報、子供の科學、科學の日本 三雜誌の九月號は天文特輯號でありました。(昭和九年二月十八日)